

最近の韓国の牛乳・乳製品需給動向

平成28年11月
独立行政法人農畜産業振興機構

調査情報部 総括調整役 伊佐 雅裕

本稿は、畜産の情報2016年9月号に掲載したレポートを、直近のデータで再構成したものです。



Agriculture & Livestock Industries Corporation
独立行政法人 農畜産業振興機構
(エーリック、農畜産機構)

本日の内容

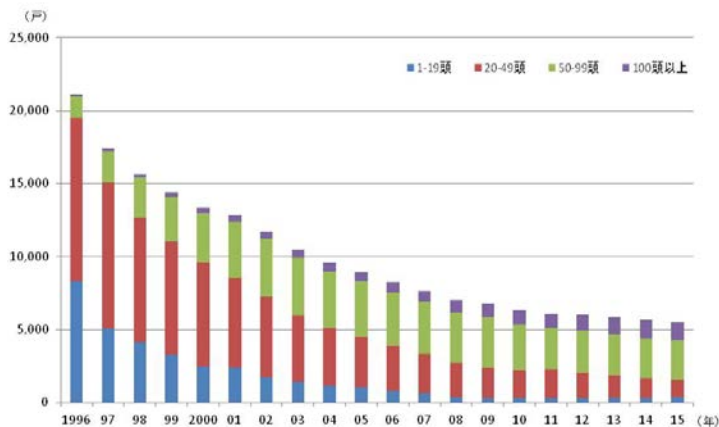
1 韓国酪農の概要	2
2 生産コストと乳価	3
3 酪農乳業団体と生乳の流通	4
4 F T A の影響と対応	6
5 生産及び消費の動向	8
6 生き残りをかけた輸出戦略	11
7 まとめ	
(1) 日韓酪農の類似点・相違点	13
(2) 韓国酪農はどこに向かっていくのか	14
(3) 日本酪農の将来は	15

- ◇ 本情報は、情報提供を目的とするものであり、取引・投資判断の基礎とすることを目的としておりません。
- ◇ 本資料の正確性の確認は、各個人の責任と判断をお願いします。
- ◇ 提供した情報の利用に関して、万一、不利益を被る事態が生じたとしても、A L I Cは一切の責任を負いません。

1 韓国酪農の概要

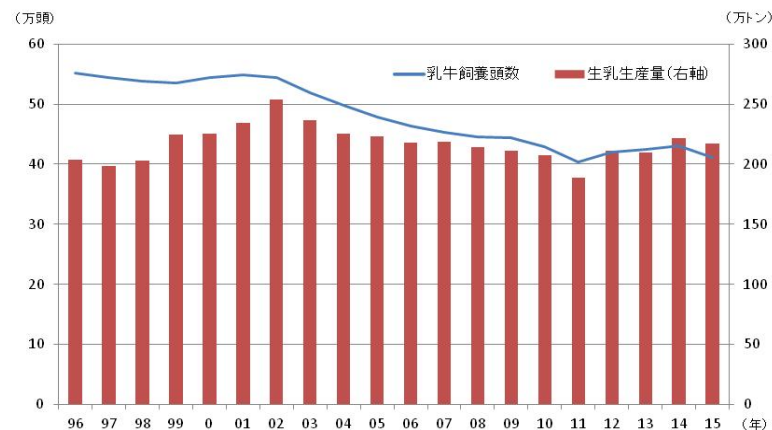
- 酪農家戸数は、通貨危機の影響もあり、1997年には小規模層を中心に大幅に減少(前年比▲17.6%)。2009年以降、減少幅は緩やかになったが、2015年は5,498戸(同▲3.4%)。
- 乳牛飼養頭数は、2002年のクォータ制度の導入、2011年の口蹄疫の発生により減少してきたが、2012年からは大規模層を中心に増加し、2015年は40万頭を超える水準。
- 1頭あたり乳量が増加していることもあり、生乳生産量は、2012年以降増加傾向で推移し、2015年には217万トン。

図1 酪農家戸数の推移(経営規模別)



資料：酪農振興会「酪農統計年鑑」、原典は、農林畜産食品部、韓国統計庁

図2 乳用牛飼養頭数及び生乳生産量の推移



資料：酪農振興会「酪農統計年鑑」、原典は、農林畜産食品部、韓国統計庁

○酪農概要(直近データ)	日本(北海道)	韓国
飼養戸数(戸)：	17,000 (6,490)	5,498
飼養頭数(千頭)：	1,345 (786)	411
一戸あたり経産牛頭数(頭)：	51.2 (72.6)	35.9
一戸あたり飼養頭数(頭)：	79.1 (121.1)	74.8
一頭あたり乳量(kg)：	8,511 (8,382)	9,477
生乳生産量(万トン/年)：	741 (390)	217

資料：農林水産省「畜産統計」、酪農振興会「酪農統計年鑑」

図3 1頭あたり乳量の推移



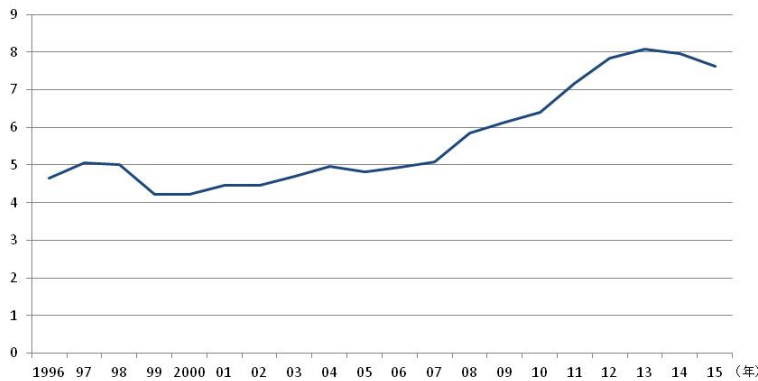
資料：酪農振興会「酪農統計年鑑」、原典は、韓国統計庁「畜産物生産費調査」

2 生産コストと乳価

- 生乳100kgあたりの生産コストは、機械化の進展による減価償却費や配合飼料価格の上昇により上昇し、2015年は7万6256ウォン(約7626円)。
- 乳価は、1998年までは政府が基準乳価を告示、1999～2012年は3～5年ごとに酪農家と乳業メーカーの個別交渉、2013年からは、政府が、生産コストと消費者物価の変動に連動した生乳価格連動制により決定。
- 輸入乳製品に比べ高い乳価となることから、国産乳製品在庫が過剰となっており、政府は、乳製品需給を考慮した算定を模索中。

図4 生産費の推移（生乳100kgあたり）

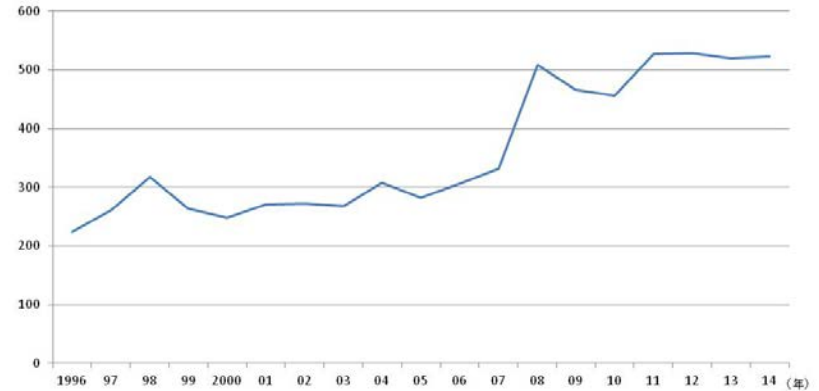
(万ウォン/100キログラム)



資料：酪農振興会「酪農統計年鑑」、原典は、韓国統計庁「畜産物生産費調査」
注：2002年までは、万ウォン/100リットル

図5 配合飼料価格の推移

(ウォン/キログラム)

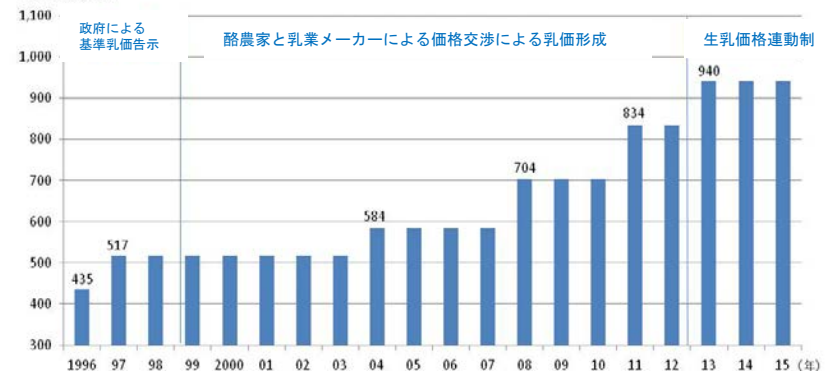


資料：酪農振興会「酪農統計年鑑」、原典は、農林畜産食品部、韓国統計庁
注：1日あたり平均乳量30～40kgの搾乳牛用飼料

酪農概要 (直近データ)	都府県	北海道	韓国
生産コスト(ウォン/100kg) :	-	-	76,256
同 (円/100kg) :	9,235	7,426	7,626
配合飼料価格(ウォン/kg) :	-	-	522
同 (円/kg) :	60.8	-	52.2
乳価(ウォン/リットル) :	-	-	940
同 (円/kg) :	100.8	-	91.3

図6 乳価の推移

(ウォン/リットル)



資料：酪農振興会「酪農統計年鑑」、原典は、韓国統計庁「畜産物生産費調査」

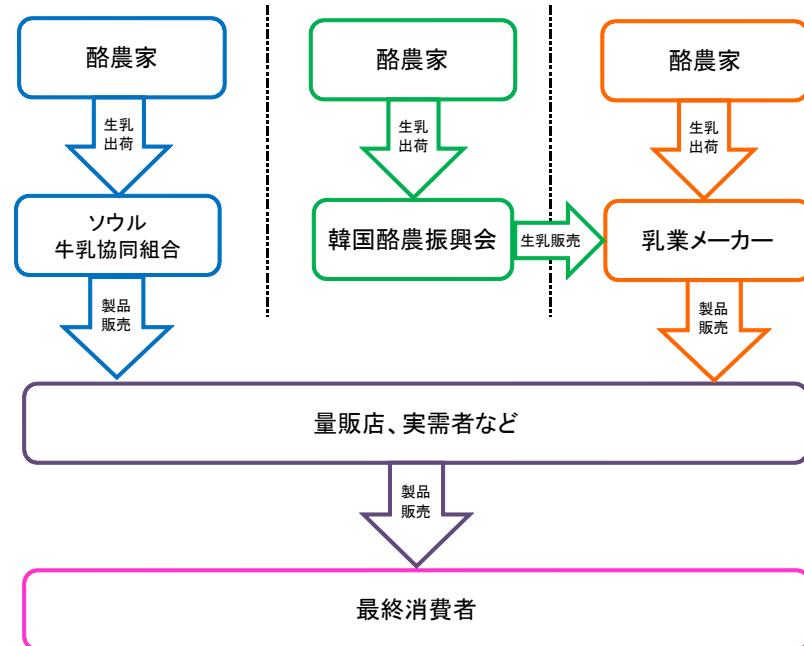
3 酪農乳業団体と生乳の流通

- 韓国にも、日本と同様な生産者団体等が存在。主なものは、全中に相当する韓国農協中央会、中央酪農会議の需給安定機能に相当する酪農振興会、中央酪農会議の消費拡大・理解醸成活動に相当する牛乳チェックオフ資金管理委員会。
- 乳業団体は、日本乳業協会に相当する韓国乳加工協会。
- 日本のような一元集荷多元販売が成立しなかったため、3系統の集乳ルートが混在。シェアもおおむね1/3ずつ。

表1 韓国の主な酪農・関係乳業団体

区分	団体名	内容
生産者団体	韓国農協中央会	1961年、農業協同組合の中央機関として設立。2000年、畜産業協同組合中央会および高麗人参協同組合と合併。主な業務は、単位農協への経営指導のほか、経済、金融、共済事業。根拠法は農業協同組合法。
	ソウル牛乳協同組合	1962年、日本による併合下に設立された京城牛乳同業組合（戦後はソウル牛乳同業組合に改称）の組合員および資産を引き継いで設立された農協。事業区域（集乳区域）は、ソウル特別市、仁川広域市、京畿道の全域と、忠清北・南道および江原道の一部。牛乳・乳製品は全国で販売。主な業務は、集乳、牛乳・乳製品生産・販売、金融事業。韓国農協中央会の傘下。
	韓国酪農肉牛協会	1981年、酪農・肉牛産業の安定的発展と国産牛乳および牛肉の供給を目的に設立された農林畜産食品部所管の社団法人。
	牛乳チェックオフ資金管理委員会	1998年、韓国酪農肉牛協会が任意チェックオフ事業を実施するために設立。2006年、義務チェックオフに移行。根拠法は畜産物チェックオフ法。会員は、韓国酪農肉牛協会、韓国農協中央会、ソウル牛乳協同組合、韓国乳加工協会および酪農振興会。
乳業団体	韓国乳加工協会	1978年、酪農・乳業の発展、乳業メーカー間の生乳取引の円滑化、乳製品の消費拡大を目的に設立。
その他	酪農振興会	1999年、集乳・販売による生乳および牛乳・乳製品の需給安定と酪農振興などを目的に、酪農振興法を根拠法として設立。会員は、韓国農協中央会、韓国酪農肉牛協会および韓国乳加工協会。

図7 生乳の流通構造



資料：聞き取りにより機構作成

- 韓国には3大乳業メーカー(ソウル牛乳、南陽乳業、毎日乳業)の他にも、多数の中規模・小規模メーカーが存在。
- 最大のソウル牛乳は、農協系であり、日本併合下の京城牛乳同業組合がルーツ。
- ソウル牛乳のほか、毎日乳業、ピングレ、延世大牛乳などは、輸出(主に中国向け)についても積極的。

図8 韓国の主な乳業メーカー

3大乳業メーカー

1 ソウル牛乳協同組合(農協系)

日本による併合下に設立された京城牛乳同業組合が起源。韓国で初めてフレーバー牛乳(チョコレート味)を生産。同組合の牛乳は、国内で最も多く飲用されており、学校牛乳にも多く採用。牛乳以外に、チーズ、ヨーグルト、チルド飲料なども生産。

2 南陽乳業(独立系)

牛乳のほか、チーズ、ヨーグルト、育粉、チルド飲料などを生産。中でも育粉は全製品売上高の3割近くを占める。韓国乳業界で初めてハラール認証を取得し、マレーシアに学校給食向けチョコレート牛乳を輸出。このほか、食品生産、飲食店業、不動産業、貸金業など、同社

3 毎日乳業(独立系)

1969年に政府の総合酪農開発事業により設立された韓国酪農加工が起源。牛乳のほか、チーズ、ヨーグルト、育粉、チルド飲料などを生産するほか、観光・直売事業として、自社でナチュラルチーズ工場を併設した観光牧場を運営。育粉は、中国、東南アジア、中東などにも輸出。

その他の乳業メーカー

ロッテフード(ロッテ系)

韓国ヤクルト傘下にあったパスツール乳業を2010年にロッテグループが買収し、2011年よりロッテフードに名称変更。韓国で初めて低温殺菌乳を生産。牛乳・乳製品だけでなく、食品全般を生産。

一同フディス(一同製薬系)

一同製薬系で、生産する乳製品は育粉など乳幼児向けが中心。韓国で初めてギリシヤヨーグルトを生産。

韓国ヤクルト(日系)

韓国で初めて乳酸菌飲料を生産。乳酸菌飲料のほかに牛乳、健康食品などを生産。傘下の乳業メーカーのヴィラックが同社の牛乳をOEM生産している。

ピングレ(独立系)

韓国で初めて固形ヨーグルトを生産。バナナ牛乳は国内で圧倒的な人気を誇る同社の看板商品。牛乳、ヨーグルト、アイスクリームなどを生産。

延世大牛乳(その他)

延世大学校がカナダから乳牛10頭を譲り受け、1971年に牛乳生産を開始したことが起源。韓国乳業界で初めてHACCPを取得。牛乳のほか豆乳を生産し、国内販売だけでなく中国にも輸出。

釜山慶南牛乳協同組合(農協系)

釜山広域市、慶尚南道などを管内とする畜産農協。牛乳のほかにヨーグルトなどを生産。このほか、金融事業を兼営。

4 FTAの影響と対応

- 韓国では、積極的なFTAの締結等により、牛乳・乳製品の自給率は低下し、最近では6割前後で推移。
- 生乳生産量が増加傾向にあること、輸入乳製品が増加したことから、2014年の期末在庫は前年の2.5倍の23万トンに増加、2015年も積み増し。
- 国産生乳のほとんどが牛乳類に仕向けられ、輸入品は約7割がチーズ。
- 粉乳類は、国産品に加え、輸入品が在庫の積み増し要因に。

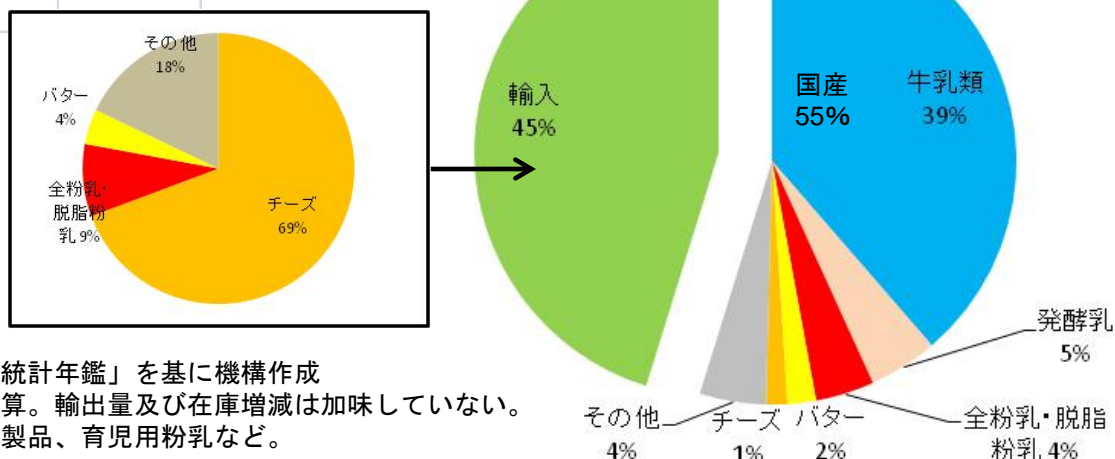
表2 生乳需給と自給率の推移

		(単位:トン)				
		2011年	2012年	2013年	2014年	2015年
	期首在庫量	12,658	18,467	91,735	92,677	232,572
	国内生産量	1,889,150	2,110,698	2,093,072	2,214,039	2,168,157
	輸 入 量	1,712,655	1,414,401	1,586,432	1,682,811	1,788,222
供 給 量 計		3,614,463	3,543,566	3,771,239	3,989,527	4,188,951
	国内仕向量	3,517,909	3,358,850	3,582,185	3,645,665	3,834,096
	輸 出 量	78,087	92,981	96,377	111,290	102,093
需 要 量 計		3,595,996	3,451,831	3,678,562	3,756,955	3,936,189
期末在庫量		18,467	91,735	92,677	232,572	252,762
自 給 率		53.7%	62.8%	58.4%	60.7%	56.5%

資料:酪農振興会「酪農統計年鑑」、原典は、農林畜産食品部、韓国乳加工協会

注:生乳換算。自給率は、国内生産量/国内仕向量

図9 韓国の乳製品輸入量及び用途別生乳仕向け量 (2015年)

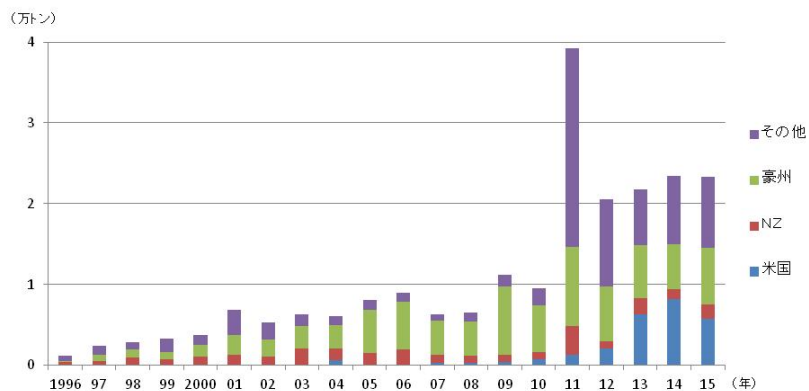


資料:酪農振興会「酪農統計年鑑」を基に機構作成

注:輸入量は、生乳換算。輸出货量及び在庫増減は加味していない。
その他は、粉乳調製品、育児用粉乳など。

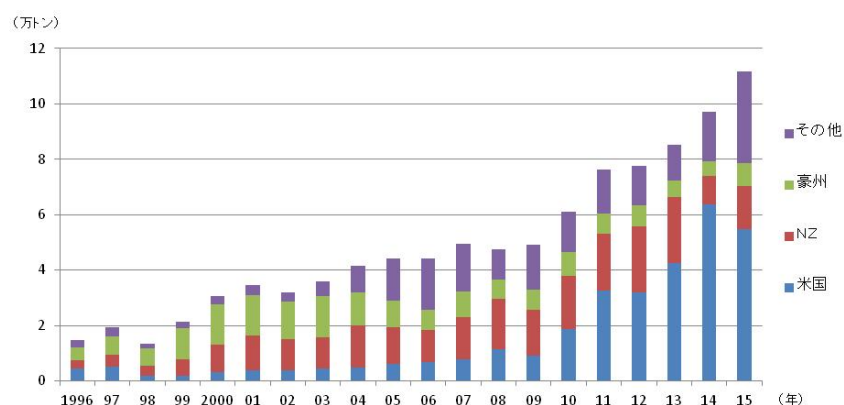
- ガットウルグアイラウンド交渉妥結後、乳製品の輸入が増加。
- 粉乳(全粉乳及び脱脂粉乳)については、5千トンから1万トン程度で推移していたが、2011年に韓国で口蹄疫が発生し、生乳生産量が減少したため、一時的な無税輸入を行い、EU産を中心に輸入が増加。2012年以降は、米韓FTAの影響もあり、2万トンを超える水準で推移。
- チーズについては、2011年の無税枠拡大により、米国産が増加。韓豪FTA、韓NZFTAの発効もあり、2015年には10万トンを超える水準に。
- バターについては、年によって変動はあるものの、5~6千トンで推移。

図 10 全粉乳及び脱脂粉乳の輸入量の推移



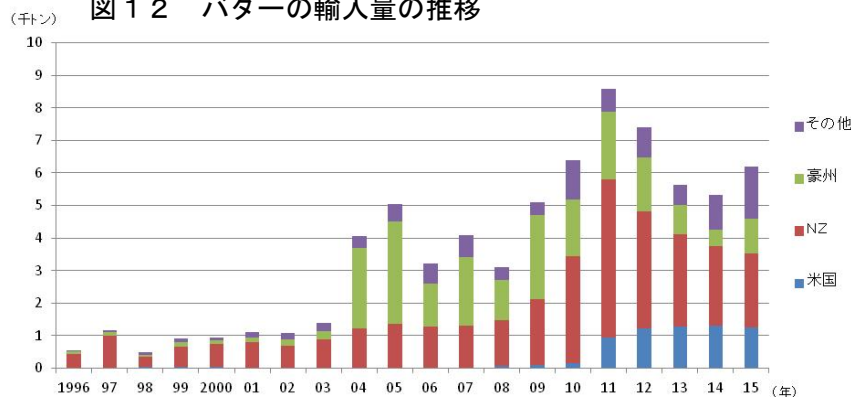
資料：「Global Trade Atlas」、注：HSコード0402、製品重量ベース

図 11 チーズ及びカードの輸入量の推移



資料：「Global Trade Atlas」、注：HSコード0406、製品重量ベース

図 12 バターの輸入量の推移

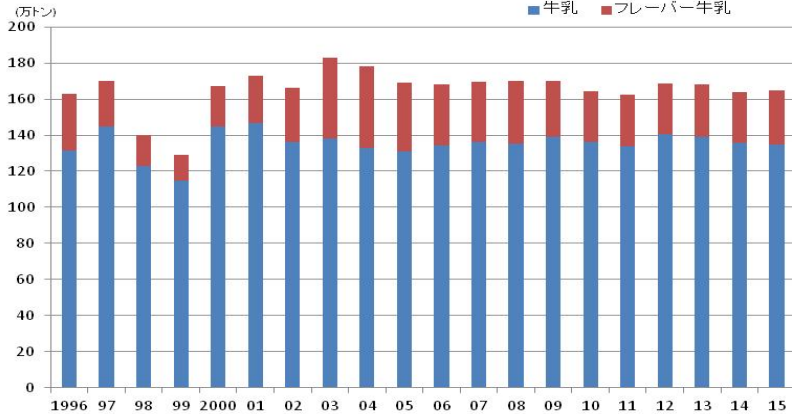


資料：「Global Trade Atlas」、注：HSコード0405、製品重量ベース

5 生産及び消費の動向

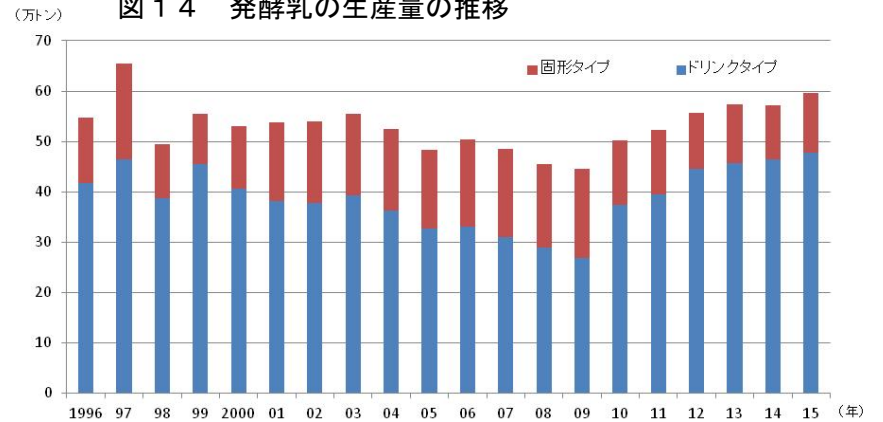
- 国産生乳の7割は市乳(牛乳)及びフレーバー牛乳向けで、合計160万トン程度。
- 発酵乳の生産量は、年によって増減はあるものの、60万トン弱程度で、8割がドリンクタイプ。
- チーズの生産量は、年によって増減はあるものの、2万トン強で、最近は、ナチュラルチーズが増加。

図 1 3 牛乳類の生産量の推移



資料：酪農振興会「酪農統計年鑑」、原典は、農林畜産食品部
注：製品重量ベース

図 1 4 発酵乳の生産量の推移



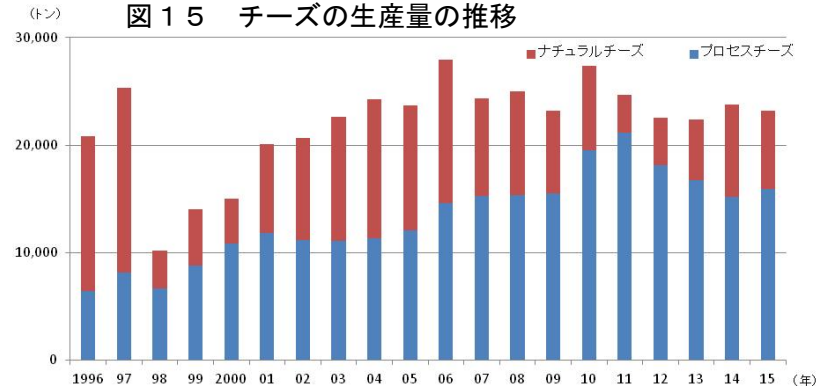
資料：酪農振興会「酪農統計年鑑」、原典は、農林畜産食品部
注：製品重量ベース

○牛乳・乳製品の生産概要（直近データ）

	日本	韓国
生乳生産量(千トン)	7,407	2,168
うち牛乳等向け(千トン)	3,953	1,529
うち乳製品向け(千トン)	3,399	640
発酵乳生産量(千トン)	1,081	597
チーズ生産量(千トン)	141	23

資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」。酪農振興会「酪農統計年鑑」

図 1 5 チーズの生産量の推移



資料：酪農振興会「酪農統計年鑑」、原典は、農林畜産食品部
注：製品重量ベース

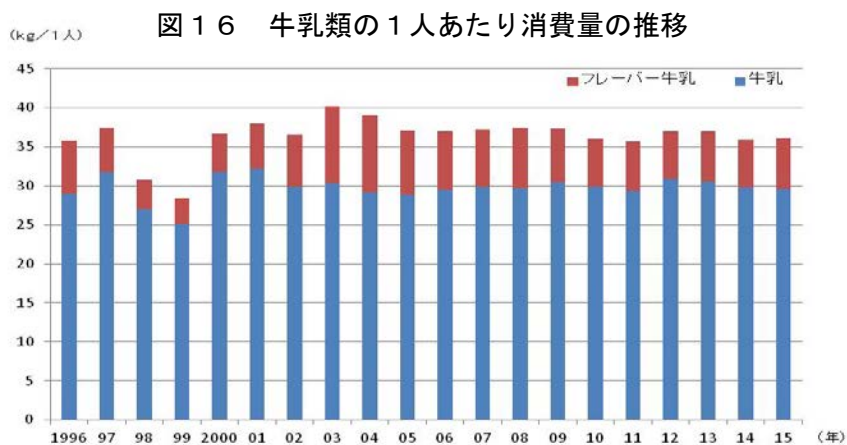
- 牛乳類の1人あたり年間消費量は29.6kg(2015年)、バナナ味やチョコレート味を加えたフレーバー牛乳は6.6kg(同)、合計で36kg程度で推移。
- ナチュラルチーズについては輸入品の消費量が大きいですが、最近では国産のカマンベールチーズなども生産。



写真1 量販店で販売される牛乳



写真2 フレーバー牛乳 (左: バナナ牛乳 右: チョコレート牛乳)



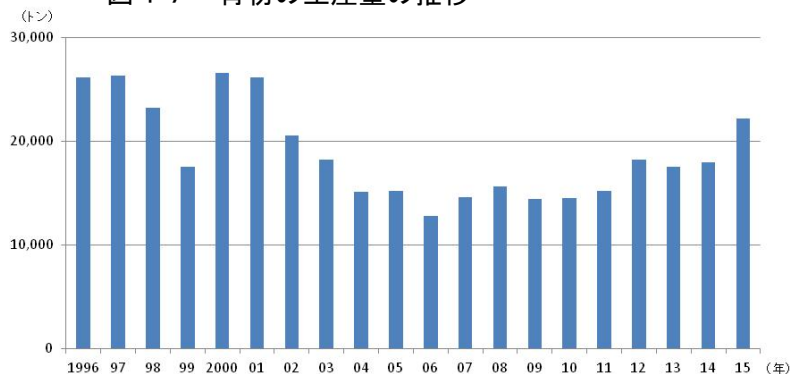
資料：酪農振興会「酪農統計年鑑」、原典は、農林畜産食品部、韓国統計庁
 注：年間総消費量（製品重量ベース）を国民1人あたりに換算



写真3 量販店に並ぶチーズ

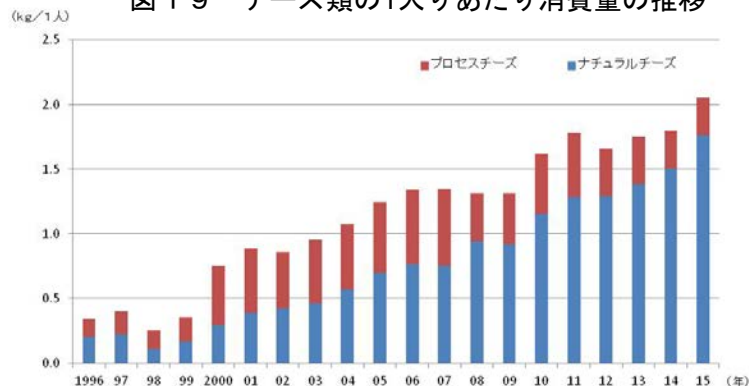
- 育児用調製粉乳の生産量は、出生率の低下により伸び悩んでいるが、最近は、中国などへの輸出が伸びていることもあり、横ばいから増加傾向で推移。
- 粉乳類(脱脂粉乳、全脂粉乳)の生産は、韓国の生産・消費構造が飲用乳主体のため余乳処理の位置づけが強い。このため、毎年の生産量は、生乳の生産量や飲用向け処理量の変動に大きく左右される。
- チーズも余乳処理の一面があるため、毎年の生産量は大きく変動するが、消費量は、輸入品がバッファとなるため、安定して増加。
- 国産牛乳・乳製品の需要の拡大のため、生産者自らが資金(チェックオフ)を出し合い、PRを実施。

図 1 7 育粉の生産量の推移



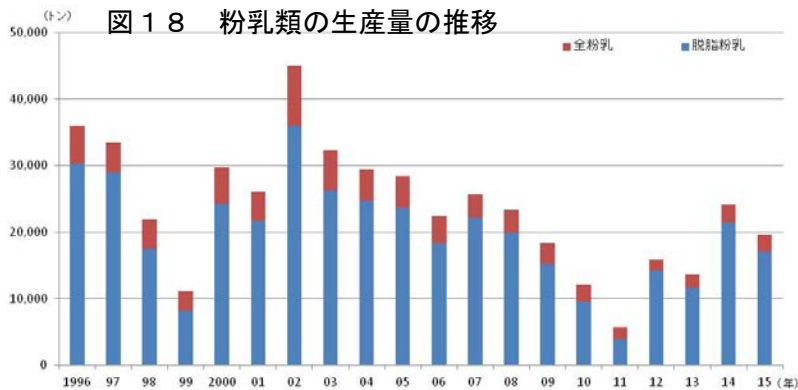
資料：酪農振興会「酪農統計年鑑」、原典は、農林畜産食品部
注：製品重量ベース

図 1 9 チーズ類の1人あたり消費量の推移



資料：酪農振興会「酪農統計年鑑」、原典は、農林畜産食品部、韓国統計庁
注：年間総消費量(製品重量ベース)を国民1人あたりに換算

図 1 8 粉乳類の生産量の推移



資料：酪農振興会「酪農統計年鑑」、原典は、農林畜産食品部
注：製品重量ベース



写真4 量販店に並ぶ育粉

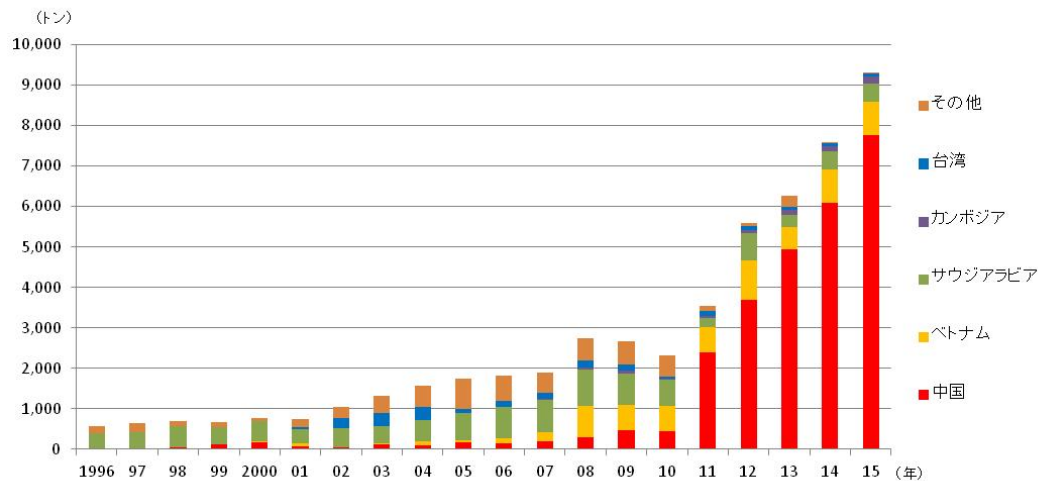


写真5 量販店に並ぶ粉乳類(左：全脂粉乳、右：脱脂粉乳)

6 生き残りをかけた輸出戦略

- 国内需要の増加が見込めない中、中国を中心とする海外市場への輸出に活路を模索中。
- 育児用調製粉乳については、中国向けの輸出が急増中。
- 牛乳等についても、LL牛乳、チルド牛乳、フレーバー牛乳など中国向けの輸出が増加。
- 海外市場の開拓に当たっては、乳業メーカーも資金(チェックオフ)を出し合い、生産者と連携して活動を開始。

図20 育粉の輸出量の推移



資料：「Global Trade Atlas」、注：HSコード1901.10.1010
注：製品重量ベース



写真6 中国で販売される韓国産フレーバー牛乳
(北京市内量販店)

7 まとめ

(1) 日韓酪農の類似点・相違点

経営規模

- 日韓の酪農は、小規模の家族酪農からスタートし、経営を中止する者と規模拡大をする者に分化しつつ発展してきた点で類似点が多い。
- また、戸数の減少による生産量の減少を規模拡大農家の生産量が補っている点で構造が類似している。
- 一戸あたりの飼養頭数等は、日本の都府県酪農に類似している。

飼養形態

- 日韓の酪農は、個々の経営が農地、施設、乳牛を所有し、購入飼料を除けば経営内で飼養管理が完結している場合が多い。
- 一頭あたり乳量は、日本が停滞しているのに対し、韓国では増加を続けている。

飼料

- 韓国の酪農は、自給粗飼料に加え、輸入配合飼料も利用するなど、我が国の都府県酪農に近いと考えられる。
- 配合飼料価格は、韓国ではかす類を多用するなど原料成分等が異なることから比較は困難だが、日本より安いと言われてきたが、為替の影響もあり、最近では逆転することもある。

生乳流通

- 韓国には、用途別乳価がなく、飲用主体の取引となっている。
- 韓国では、日本の指定生乳生産者団体に当たる酪農振興会があるが、組織率が1/3程度と低い。
- このため、集送乳経路が交錯するなど、集送乳経費が高いと言われている。
- 小売価格も、日本に比べると高い傾向にある。

(2) 韓国酪農はどこに向かっていくのか

- 韓国の酪農は、酪農家戸数、飼養頭数、生乳仕向先など、日本の都府県酪農を一回り小さくした印象。
- 政府の生乳価格連動制により乳価が維持されていることから、現在、生産は安定しているが、今後、FTAによる輸入乳製品の増加によって、粉乳類、発酵乳向け需要は少なからず影響を受けるものと思われる。
- さらに、生乳価格連動制の見直し如何によっては、乳価が低下することも想定され、牛乳向け以外の生乳生産が減少する可能性がある。
- このため、韓国では、中国を中心に、飲用乳、発酵乳等の輸出に活路を見いだそうとする動き。
- また、中国で人気のあった日本産育児用粉乳の代替として、中国での市場を確保しつつある。

○ソウル市近郊のA牧場

搾乳牛 62頭

後継牛等96頭

他に、水田6.6ha、畑3.3ha

出荷先は、ソウル牛乳ではなく、延世大牛乳。

延世大牛乳は中国にもチルドの飲用牛乳を輸出しており、A牧場の牛乳は、中国に輸出されている可能性がある。



写真7 飼養風景（左側が育成牛と乾乳牛、右側が搾乳牛と育成ステージ毎に管理）

(3) 日本酪農の将来は

- 日本の酪農は、北海道（加工原料乳）と都府県（飲用乳）の役割分担が特徴。
- この役割分担のもと、飲用乳向けの外に、バター・脱脂粉乳や生クリームなどを国内生産。
- 酪農をめぐる様々な議論が進む中で、様々な角度から日本酪農の将来を検討する必要。

図 2 1 我が国の地域別用途別生乳仕向け量（2015年度）

